

## 12.子ども食堂のあるべき姿：愛知県内の子ども食堂調査で見えたこと

林鷹一

### 第一章 はじめに

今日の日本では、子どもの貧困、そして子どもへの虐待が問題になっている。子どもの貧困率は全国平均で13.9パーセント数にすると約7人に1人の確率である。かなりの数だ。

そして、貧困も問題であるが、最近よく耳にするのが、虐待である。つい最近も千葉県で10歳の女兒が虐待死したというニュースを見た。こういったニュースを最近よく目にする。

それもそのはずだ。2017年度の一年間で愛知県豊田市の児童相談所が対応した児童虐待相談数は、なんと400件にのぼる。恐ろしいのは、これが氷山の一角ということだ。これは、あくまでも児童相談所に相談に来た数であって、実際に虐待を受けている子というのはもっとたくさんいる。

このような虐待が起きてしまう理由として挙げられるのが、家族機能の縮小である。学校や行政が、深く介入できない風潮がある。そのため、誰にも助けを求められない、つながりのない社会のため、すべての責任が家族に押し付けられている。

このように、悪循環の社会。一步踏み出せば救える命をどう救っていいのか。

その問題を解決するために、近年愛知県のみならず、全国各地で子ども食堂が盛んに開設されている。2012年に東京都大田区で産声を上げてから、2018年までにオープンした件数は3,000件を超えるという。

しかし、子ども食堂にはそれぞれに問題も抱えている。一番大きな問題が、どのように継続させていくかであろう。短期間で終わってしまうところと長期間続くところの違いは何であろうか。

そこで、どのような運営方法であれば、長期間にわたり子ども食堂を継続させることができるのか、データを基に追及していきたい。

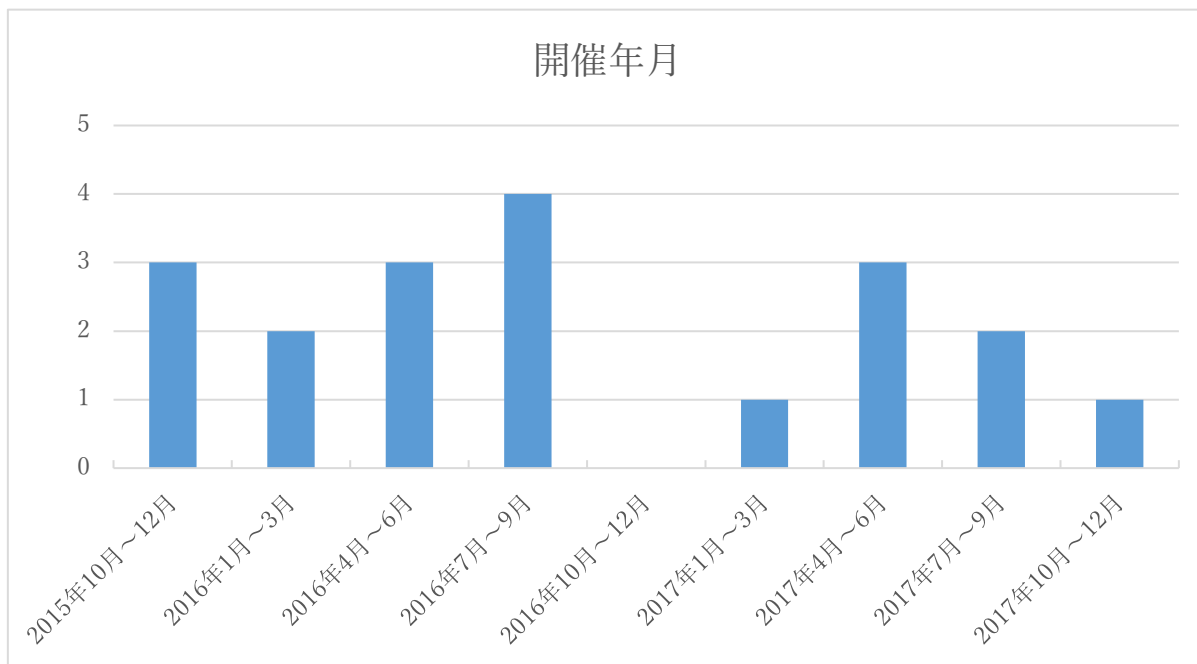
### 調査方法

本稿は、子ども食堂が長期間継続する上で必要なことを見つけるため、愛知県内の子ども食堂運営者・利用者それぞれにアンケート調査を行った。

その結果から「運営側が目指す子ども食堂・利用者が求める子ども食堂」の違いを<1.子ども食堂利用者の大半は子どもだが、高齢者も全体の3割近くを占めている。2.子ども食堂の主な活動は、利用者が求めていることを満たすには不十分である。3.利用者は人との交流機会を求めている。>という仮説を立て調査をしていき、子ども食堂を始めるにあたってどのようなことを重視し運営していけばよいのかを考察したものである。

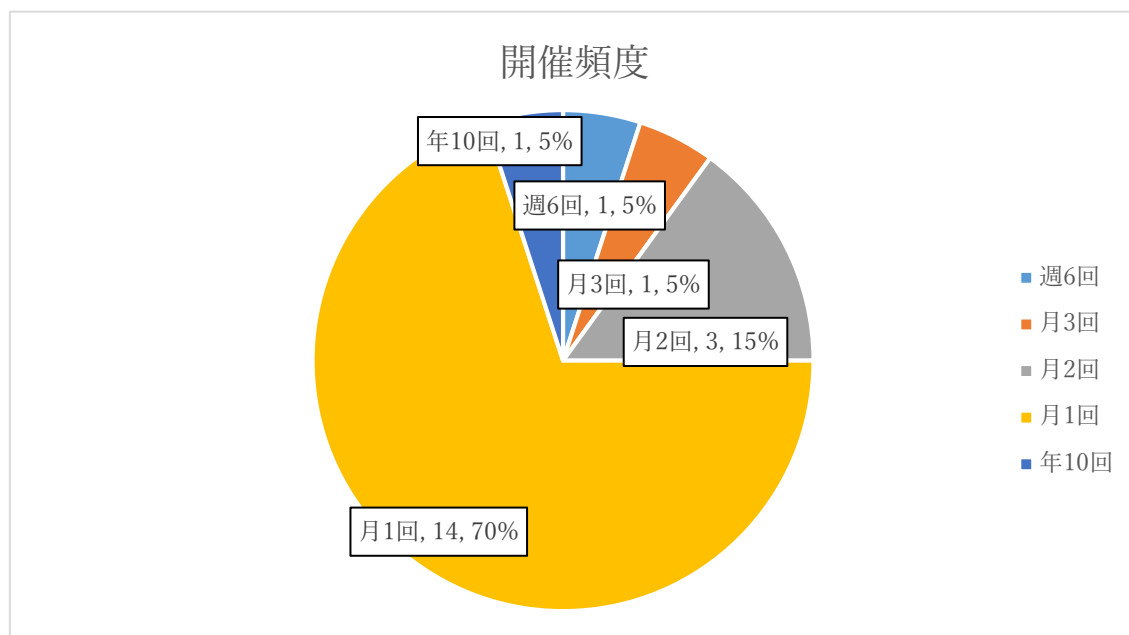
### 第二章 調査結果

まず、子ども食堂の開催年数を調査してみた。



これを見ると、2016年7月から9月が最も多く、次いで2015年冬、2016年4月から6月、そして、2017年4月から6月と続く。このことから、愛知県では、2015年ごろから徐々にはやり始めている。また、小学校、中学校が夏休みや冬休みといった長期休暇のタイミングで子ども食堂をオープンしているということがいえる。

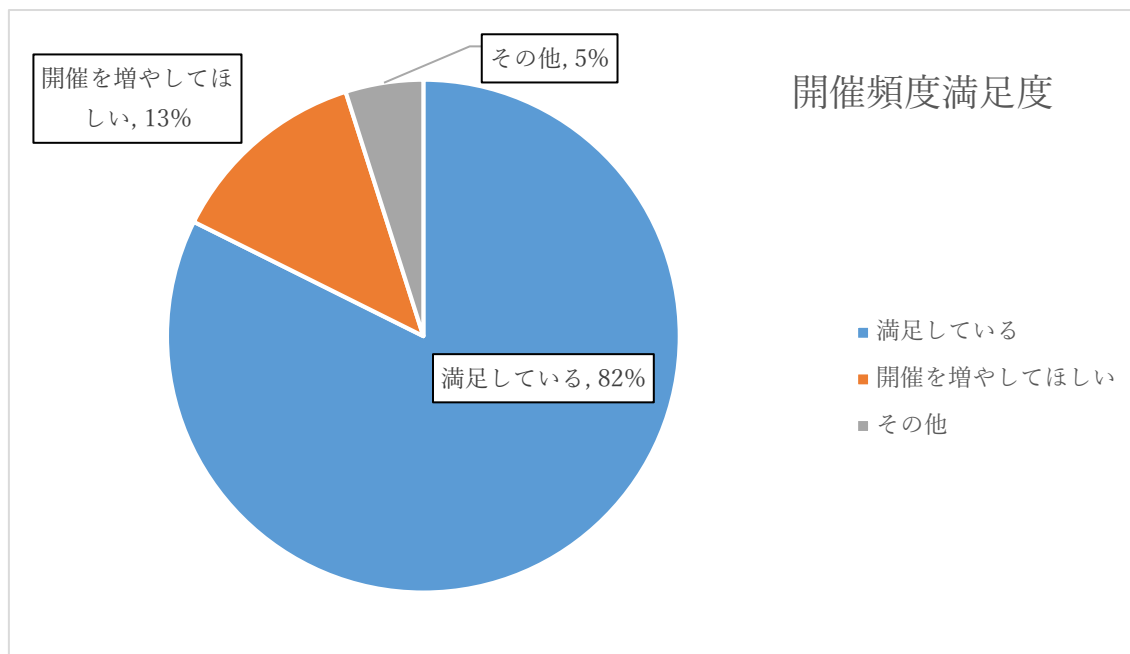
次にどのくらいの頻度で子ども食堂を開催しているか調べてみた。



この結果から、毎月1回の開催が70パーセントと最も多かった。中には、ほとんど毎日開催している食堂もあった。毎日開催していれば、子ども達も気軽に立ち寄れる。しかし、運営者からすると、毎日開催すると、食費などの運営費がかかってしまったり、自分の自由な時間が減ってしまい、負担が大きくなる可能性もある。こうした運営者目線から見ると、

月 1 回の開催であれば、負担も少なく子ども食堂を継続できるということが分かる。

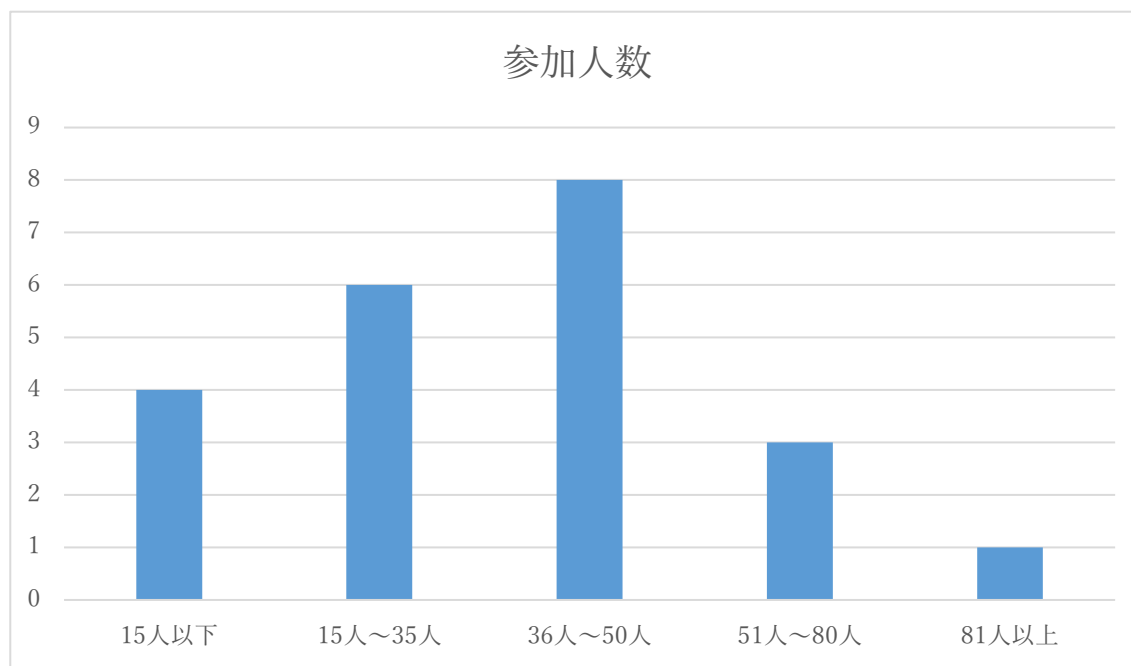
では、果たして利用者は毎月 1 回の開催で満足しているのでしょうか。そう感じたので、利用者のアンケートも実施した。



これを見ると、利用者もほとんどの人が毎月 1 回の開催で満足している。

この結果から、毎月 1 回開催の方が、開催者にとっても利用者にとってもどちらも都合が良いということが分かった。

参加人数についても調査してみた。結果がこれである。



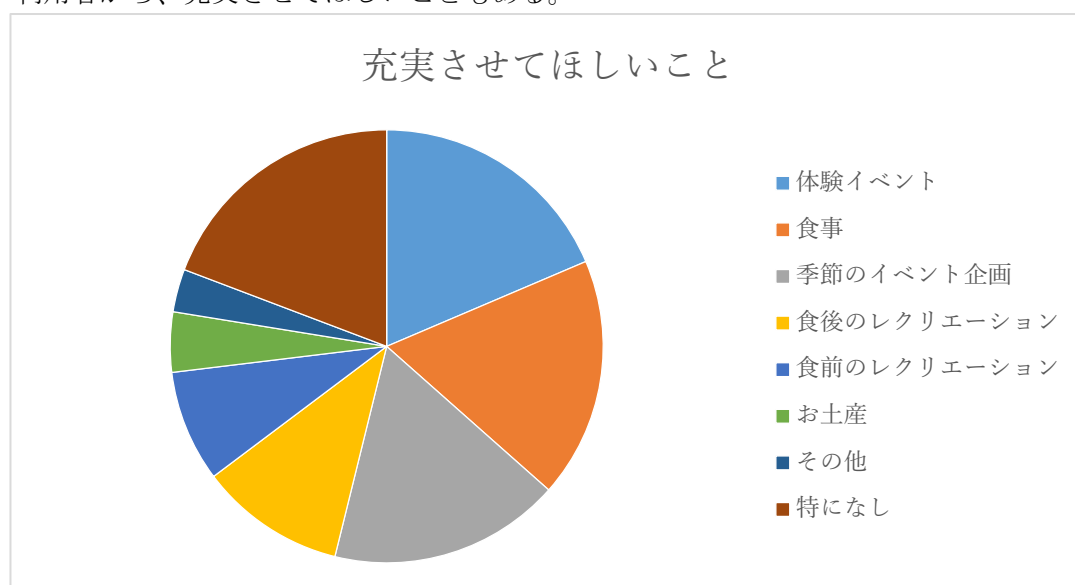
15 人以下というこぢんまりと開催しているところもあれば、多いところでは、100 人を超える参加者が集まるところもあり、非常に様々な形態の子ども食堂があることが分かる。例

外もあるが、基本的には参加者が多ければ多いほど、地域に密着していて、自治会や学童クラブといった団体や、近隣住民からのサポートが手厚い。

そして、子ども食堂の運営者が感じている課題についてもアンケートを実施した。

課題は、開催場所の確保、参加者の食物アレルギー対策、開催日時、運営者スタッフの不足、新規や継続参加者の確保、運営費不足、近隣住民の認知度不足が挙げられる。

利用者から、充実させてほしいこともある。



一番多かったのが、芋ほりなどの体験イベントであった。次が、食事メニューの改善、節分や七夕、クリスマスといった季節のイベント企画の充実、食前後の参加型レクリエーションと続く。もちろん、上記以外にも子ども食堂の開催数を増やしてほしいという要望や、子ども食堂といっているのに、辛い食べ物はやめてほしいといった意見もあった。これを見ると、子ども食堂は、食べる場所ではなく、遊びの場、交流の場といった、新たな居場所として求めている人たちが多いことが分かる。

ここからは、実際に子ども食堂に参加して、アンケートでは分からない現場で感じたことを述べていこうと思う。

今回参加した子ども食堂は、名古屋市緑区の「さばんなかふえ」、名古屋市南区の「マルチャンゴー」、東浦町の「はるたま」、大府市の「大府子ども食堂 ふれあい食堂」、日進市の「日進絆子ども食堂」の5会場である。それぞれ良さもあり、改善点もあったのでまとめていきたい。

#### さばんなかふえ

この食堂はもう一つの家、もう一つの家族みたいな場所になったらいいなという思いで発足した。そのため、子ども食堂に関わる大人が子どもの居場所について意見交換する地域ミーティングやプレオープンの実施など、段階を踏んできたという。食だけでなく、遊びや学びと多面的な育みの要素をもった子どもたちの居場所作りを意識している。さらに、与えられるだけの場だけでなく、子どもたち自身の思いや力といったものを共に形にできる場であるように地域ぐるみでサポートしている。

場所は、ふれあいステーションもりのさとで行われている。参加人数は50人程度と子ども食堂の中では多い方だ。こちらは、食堂自体の開催は夕方から行っているが、開催当日は、朝から開催しており子ども達のにぎやかな声が聞こえる。森の里団地のちょうど中心に位置している。そのため、参加するほとんどの人が団地の人である。こども食堂に来ている子ども達をみると、同じ団地内ということもあって、学年関係なく幼稚園児から中学生までみんな一緒に遊んでいた。お互いに呼び合っていた。

また、子ども食堂の開催日を団地周辺の人たちが知っているらしく、近所の農家や住民から沢山の野菜やお菓子が届けられていた。

近隣住民とも仲良くしており、一見困ったことはなさそうに思えた。しかし、運営者が抱えている課題は、資金調達とスタッフ不足、開催頻度の3つである。特に子どもたちと遊んだり話をしたりするスタッフが足りない。また、夕方から夜にかけての開催なのでボランティアのさんが難しいという声もあった。子ども食堂自体は月に一回の開催であるため、いつでもそこに行けばいつもの人がいる場所ではない所も課題として取り上げている。

以下は、実際に参加して感じた点である。

まず、「いただきます」をみんなでやらない事だ。12:00頃になり、お昼ごはんが出来る時、最初に厨房で作っていた人たちが「ご飯出来たよ」というだけで、あとは子ども達が勝手に盛り付けをして食べてゆく。そのため、お昼を食べるタイミングがバラバラになっていた。中には「いただきます」すら言わない子もいた。

次に、職員の名前が分からないという事だ。聞きたくても名前が分からない、という状況に何度か遭遇した。また、子供たちもイマイチ名前が分からない人がいるらしく、「ねえねえ誰？」と呼ぶシーンを見かけた。

そして、他の子の手を踏んだり、我々ボランティアを蹴ってきたりする危ない子がいた。こういった子には、普段は優しく接する、でもいけない事はしっかり叱るという区別をはっきりしていくべきだと感じた。

また、夏季は、夕食が済むと花火大会が始まる。この食堂は、小学生以下の未就学児の子どももたくさん参加している。しかし、いくら夏とはいえど、夕飯が済む19:00は、日も傾き薄暗くなる。そんな中で大学生のボランティア含む大人の人数に対して子どもの数が圧倒的に多いため、次回以降は何かしらの対策を練らないと事故が起きてしまうと感じた。

花火以外にも、外で水遊びをすると、当たり前だが濡れて汚れる子が出てくる。そういった子が、そのまま食堂に入ってきてしまうので、足を拭く雑巾が必要と感じた。

## マルチャンゴー

この食堂は、丸山圭子さんが代表者として個人経営している。丸山さんがマルチャンゴーを始めたきっかけとしては、娘の友人が晩御飯を一人で食べていると聞いたこと。テレビで子ども食堂のニュースを見てこれをやりたいと思ったことである。そして、この食堂のすごいところは、個人経営にも関わらず、平日は毎日開催している所だ。平日に毎日食堂を開く理由としては、昼にカフェを開いており、コミュニティ食堂を平日毎日できるだけ場所があったから。子ども達に丸山さんがどのような思いでマルチャンゴーを開いているのかを伝えるためには、できる限り子ども達と関わる時間が必要だと思ったから。

マルチャンゴーは、静かで落ち着いた喫茶店のような雰囲気だった。運営者である丸山さ

んは、すごく気さくな方で初めて会ったとは思えないような、非常に距離が近く接しやすい方だった。丸山さんの気軽に話せる性格と毎日開催ということもあり、参加している人たちもプライベートな話までしており、地域と密着していると感じた。

この食堂は、食事以外のプログラムというのは特に決まっておらず、1人1人が自分の時間を過ごしている。例えば、子ども達の中にはトランプや将棋などをして楽しむ子もいれば、丸山さんのお手伝いをしている子もいる。高齢者達は近所の人とおしゃべりをして過ごしている。参加者はほとんどが常連で白水小学校の生徒や名南中学校の生徒、マルチャンゴの近隣に住んでいる高齢者の方が多い。高齢者の中にはバスを使ってきている人もいる。また、多くはないが遠くから子連れで来る方もいる。マルチャンゴに初めて来るという人も週1ペースでいる。

毎日開催しているので、もちろん運営費もかさんでしまう。それを少しでも負担を減らせるようにと様々な人たちから支援を受けていた。例えば、米や、野菜を寄付してもらったり、市や区の社会福祉協議会から、助成金をもらったりと、地域と密着し手厚いサービスを受けている。

やはり、毎日開催しているだけあり、徐々に友人関係などの子ども達の状況がマルチャンゴに反映してきている。

運営者が、課題として挙げていたのは、子どもや高齢者だけでなく、障害を持っている方も含めもっとたくさんの人に来てもらえるようにすること。来てくれている人にとって色々な人が集まり、様々なことを学べる、第二の家のような場所を提供する。この2点だった。

感じた点は、まず、高齢者の方が多いことである。そのため、普段会話している時の音量、スピードでは、聞き取れないらしく何度も聞き返されるということがあった。次は、マルチャンゴの場所が入り組んだ集合住宅の一角にあるので、大通りに看板を設置するなどしないと、場所が分かりづらい。

高齢の方の来店が多かった。丸山さんとプライベートな話までして、地域に密着している雰囲気だった。

#### 大府子ども食堂 ふれあい食堂

この子ども食堂は、水野尊之さんが立ち上げた。子どもから大人までみんなが集える場所を作りたいという思いがある。この地域のつながりが希薄してきた今、食を通じて顔と顔が見える地域づくり、地域で一人で食べている方や両親が共働きで一人の方などが食事を通じて、人と人とがふれあえる場所を提供している。地域のつながりや交流を育めるための取り組みもしている。また、レクリエーションを通して子どもの笑顔になる取り組みや多世代交流を行うきっかけづくりも行っている。

大府子ども食堂が地域にとってかけがえのない場所、懐かしさや温かさを感じられるみんなの居場所、そんな場所になるように運営している。

大府子ども食堂の子どもは主に大府市の横根町付近に通う小学生である。中学生以上は見受けられなかった。代表者である、水野さんは人脈が広く、顔が広い。例えば、沖縄出身のカメラマンであったり、岐阜県土岐市からボランティアとして参加している人もいたり、トヨタ自動車の社員もボランティアという形で参加していた。他に時々、社会福祉協議会の

人も様子を見に来ていた。

また、この食堂は、レクリエーション活動が活発な食堂でもある。水野さんが、参加してくれている子ども達に楽しんでもらえるように、力を入れている。専門の先生による体操教室が開かれたり、地元の電子紙芝居発表グループを呼んで、紙芝居や手品、歌を披露したり、ボードゲームの団体を呼んで、様々なボードゲームをやったり、バランスボールのインストラクターの方々と共に、運動をしたりしている。

レクリエーションの中には、子ども食堂のから飛び出した日もあったそうだ。その日は、レクリエーションはふるさとガイドおおぶさんによる大府市周辺散策。コースは鈴木バイオリンの跡地、至学館大学の構内見学、二ツ池の散策、セレクトナ内見学、巨峰を広めた早川ぶどう園。特に至学館大学構内見学では女子レスリング部が練習しており、メダリストの登坂選手や土性選手を間近で見られて参加者たちが喜んでた。

この食堂自体は2019年1月現在で28回開催している。そのため、地域にはだいぶ根付いていると思われる。しかし、会場の店員が30名なので、広まってきて、参加者が増えるとう会場を変更する必要がある。

このように、子ども食堂の中では、比較的派手に大々的にやっているが、課題もあるという。1つ目は、エアコンをつける為に1,000円必要など、施設を借りるのに経費がかかるところだ。子どもも気軽に来られるよう無料にしたらいいと思うのだが、なかなかそういうわけにもいかないと思われる。2つ目は、いつも来た人から食べ始めており、一緒に「いただきます」ができない。早く来た人が料理を目の前にして待たせているのが申し訳ないのはわかるが、いっしょに「いただきます」をすることは大事だと思う。

実際に参加した時は、いつもやっている形ではなく、「第二回ファミリーフェスタ」というイベントに出店していた。

この「ファミリーフェスタ」は、会場が大府市役所ということもあり、人がたくさん集まって繁盛していた。また、大府子ども食堂以外にも、スギ薬局や刈谷工業高校校など、およそ30もの団体が出展する、規模の大きいイベントだった。

大府子ども食堂が出品したものは、カレーやから揚げ、おにぎりの他にもようかんやカンパン、水といった非常食の販売。思いのほか、フェスタに来ていた人の非常食の食いつきがよく、ほとんどの商品が完売した。

#### 日進絆子ども食堂

この子ども食堂は、いきいき塾NPO絆が運営している。NPO絆は、中高年、定年退職者のそれぞれの知識、経験、人脈などの力によりイベント、セミナー、交流会等を開催し、高齢者、障害者、の暮らしのサポート、住居及び住環境についての相談、支援及び情報の提供に関する事業を行い、消費者の保護と地域福祉の向上を図り、広く公益に寄与することを目的とする。この団体の理念は、住み慣れた環境で、安全、安心して暮らす為に、高齢者障害者の夢の実現、「終の人生」の喜びを与える。また、この目的達成のためにこども食堂だけでなく、暮らしのサポート、イベント、たまり場サロンの運営といった活動をしている。

日進絆子ども食堂を始めたきっかけは、一人で食事をしている子どもにお腹いっぱい食べさせてあげたい。子ども1人でも入れる場所を提供したい。ひとり親家庭の親子も、気軽に子ども食堂に来られる体制を作りたい。食後は、子どもたち同士で遊べる場所や、親同士

のコミュニティができる場所作りを目指している。地域のこども食堂に行きたい人、手伝いたい人を結び付けたいという思い。

日進絆子ども食堂はにぎわい交流館という日進市役所の隣の建物で開催されている。そのため、日進市役所を目指していけばよいので、初めての人でも迷うことなく、到着できる。また、車でなくても、日進市役所の目の前に止まるバスがあるので、アクセスはしやすい。にぎわい交流館は、遊ぶ場所やご飯を食べる場所など場所としてはとても良い場所である。日進絆子ども食堂の課題は地域に根付かせることだ。根付かせるためにチラシを回覧板に混ぜるなどしている。また、日進のお祭りに日進絆子ども食堂として、ブースを出して宣伝している。日進市には4大まつりがある。日進市にはにしん市民まつりという大きなお祭り行事がある。その中のにしんわいわいフェスティバルとにしん市民祭りの2つにブースを出して宣伝をしてきた。にしんわいわいフェスティバルでは子どもたちが好きそうな糸紐くじを作ったり、ポップコーンや綿菓子などを手作りで作って販売したり、冷やしたジュースを売ったりしていた。糸紐くじには子どもの好きそうなロケット鉛筆やちょっとした紙パックジュースなど、子どもの好きなものを景品にした。くじ引きやポップコーンを買ってくれたお客様に日進絆子ども食堂のチラシを配ることによって宣伝することが出来る。そして売り上げは子ども食堂の資金源になる。

もう1つのお祭りがにしん市民まつりである。ここではくじ引きやポップコーンなどは作らずにブースだけを出した。そこで輪投げをして子どもたちが遊んでいる間に親にチラシを配るなどをして、子ども食堂を地域に根付かせるような努力をしてきた。ブースで足を止めてくれない家族連れにも、声をかけチラシを配り、PR看板を掲げて移動をして子ども食堂の事をアピールした。

また、地元テレビで放送されることもあるらしく、少しずつ認知されてきてはいる。運営者自らが積極的にアピールをしているので、深く知ってもらうきっかけとして、お祭りでのブース設置は良いと思う。

日進絆子ども食堂は、他の子ども食堂とは少し違い、特徴的だ。運営者などの代表には食事提供を考えたり、そのメニューを作ることをメインでしている。一方で、我々中京大学や愛知学院大学の学生は、学生グループとして、子ども達と一緒に遊べる内容を考えたりする。学生グループは、運営者より子どもたちと歳が近いので、子ども達の立場になりやすい、という考えからできた。また、このように運営者は食事関連、学生は子どもと遊ぶと分業することにより、自分のやる事が明確になるので、効率的にこども食堂を運営できる。

実際に日進絆子ども食堂は1度参加したことがある。

その時は、クリスマスシーズンだったということもあり、お菓子のプレゼントや会場全体がクリスマスムードだった。

この子ども食堂は、人柄が良く初めて参加したにも関わらず、すぐにチームの輪の中に入れてくれたので、気まずい感じや孤立するということは無かった。結果的に子どもたちだけでなく、ボランティアに来ていた他大学の人たちと一緒にテーブルゲームをするほど打ち解けられた。

まとめ

愛知県内の5会場を訪問してみたが、それぞれが自分のスタイルで経営していた。このよ



うに、地域や担い手、開催場所によって、時間帯や内容などは、多種多様にしていけるべきだと思う。これが、子ども食堂のスタイルと確立するのではなく、運営者と地域住民たちと創意工夫を凝らして、それぞれの地域に合ったスタイルでやっていけるべきだ。そうすれば、子ども食堂の可能性や課題ももっともっと見付き、よりよいものになっていくであろう。

子ども食堂というのは、どうしても貧困の子どもが食べ物を求めて行く所、というイメージがまだ残っている。しかし、一昔前では、給食も貧困家庭の子どもの救済というイメージが付いていた。実際に給食という制度が出来た当時は、学校側が、弁当を持ってこられない貧しい子どものためにやっていたものだった。そのため、学校給食は国の制度によるものではなく、自主的にやっていた慈善事業だった。そこから、長い時間をかけ、色々な工夫を凝らし、イメージを払拭してきた。今では、貧困の子どものためというイメージはなく、給食の時間が楽しいから、その目的のために学校に登校している子もいるぐらいなので、驚きだ。だから、子ども食堂＝貧困の子どもが行く所というイメージも、時間がたてば、いずれなくなるであろう。

子ども食堂のこれからは、多様なつながりを持つこと。その多様なつながりも、太いものではなく、緩やかに細く、でもしっかりといったつながりを目指すべきである。具体的に言うと、派手にやる必要はなく、継続的にやるということだ。今日の日本は、隣の家に住んでいるのかも分からないような状態が多い。そういった冷たい関係ではなく、地域住民同士を繋げる、繋がるためのツールの1つとして、食にした。それが、子ども食堂だと思う。だから、運営者が、団体であっても個人であってもそれは変わらない。

虐待というワードを頻繁に聞くようになった。上述したが、これもその家族に押し付け過ぎなのだと思う。子ども食堂は、困ったらいつでも駆けつけて、ヘルプを求められるところ。子ども食堂を地域に根付かせる、「普段」の繋がりにしていける。子ども食堂と地域住民の関係を「日常」にしていく。子ども食堂に行きたいという人が偏見を持たずに行ける場所。そんな常設の場所になるべきなのではないかと思う。

#### 参考文献

<https://www.mugendai-web.jp/archives/9159> 閲覧日 2019年1月25日

<https://news.yahoo.co.jp/byline/yuasamakoto/20170701-00072789/> 閲覧日 2019年1月25日

<http://obu.genki365.net/gnko04/mypage/index.php?gid=G0000935> 閲覧日 2019年1月28日

<http://shimin-kouryu.net/event/8248/> 閲覧日 2019年1月28日

<http://www.juk2.sakura.ne.jp/rekisi.html> 閲覧日 2019年1月30日